「ひじりめん卯月紅葉」試論
―「水晶」・「緋縮緬・帯」の演出作意―

バス・アンビカ

はじめに

近松門左衛門作「与兵衛お亀緋縮緬　卯月紅葉』（宝永三年・1706年）（以下は『卯月紅葉』を使う）において「水晶」・「緋縮緬」という「もの」が用いられている。中之巻では、蔵に閉じ込められた与兵衛が窓から漏れ入る日差しで「水晶」に火を起こし煙草を吸うが、その火縄が舅に見つかってしまい、家から追い出される。そして本作品の題名の角書きとして「緋縮緬」が書かれており、それは中之巻・笠屋内の場では、盲目の伯母がお亀に緋縮緬を渡すことに由来する。その「緋縮緬」を持ってお亀が、家から脱出し与兵衛と心中場に向かう。さらに、与兵衛がお亀の喉を刺した後、その傷口を隠すために帯を巻く。一方、その後作『卯月潤色』（宝永四・1707年）中之巻でも生き残った与兵衛が伯母から届いた白縮緬の一筋をお亀の位牌に巻き、もう一筋を自分の体に回し、後追う心中を計るという設定がある。近松は『卯月紅葉』では、お亀与兵衛の若夫婦を心中までに至らしめるという内容的な展開に関わる「もの」として「水晶」・「緋縮緬」を用い、登場人物の心理の変化や事態の推移を象徴的に描写する技法を示している。そして「水晶」に「日差し」を集める演出や、緋縮緬を首に巻く人形操作、からくりの技法によって観客に感銘を与える見せ場を作っている。

時松孝文氏は、近松が『卯月紅葉』の中之巻で、与兵衛に「水晶」で「発火」させる趣向を、結末にお亀が与兵衛とわたる梅田川と、最期に沈む樋之口池の水と関連があると述べている。[注①] 彼によれば、この配慮には初期の浄瑠璃の二つの考え方がある。一つは内容的で、もう一つは演出的である。内容的には「一心二河白道」の思想であり、心を交わし合っている相手が、運命に巻き込まれ、地獄の「火の河」を渡る最

中に別れてしまうという中世的な思想があるという。演出的な理由とは、初期の浄瑠璃において「火河」の趣向が「赤縮緬」で演出されていたということと関わるものである。時松氏は、その用例として『一心二河白道』や、『国性爺合戦』の河を上演の場面を上げている。一方、白縮緬は浄土への道を表現するために使われた「もの」である。同様に、『卯月潤色』の「白縮緬」は与兵衛とお亀が一連の上に辿る道の表現する「もの」である。さらに彼は、近松が意図的に「帯の色と形、からくりの火、水と言ったものの喚起する力」によって人形操作の見物が脚色していると述べ、浄瑠璃上演史における「火・水」や「もの（帯）」の形・色彩的な変化を表現技法として論じている。

だが、本作品において「緋縮緬」とは、盲目の伯母がお亀と与兵衛に渡した「もの」である。時松氏は、近松が「水晶」・「帯」という「もの」は、内容展開において伯母、お亀、与兵衛の三人役柄に起こる心理的な変化を、どのように影響しているかという研究の余地を残している。本稿では、あえて作者はなぜ「緋縮緬」と「水晶」を用いているか、その意図を明らかにしてゆく。

一　「水晶」・「火打石」で「発火」する趣向を巡って—

『卯月紅葉』中之巻・笠屋内の場において与平衛が「水晶」で火を起こす、それに対してその後作『卯月潤色』において与平衛が「火打石」で火を起こす。近松は、積極的な現象を巡る場面を設定している。これらの場面は、それぞれの作品の筋をその結末、つまり若夫婦の心中、その失敗、また与平衛の後追い心中という連鎖的な悲劇に展開するものである。そして人物の内面的な変化を捉え、役柄を伝える役割をしていると評価されている。[注(2)] そこで近松は、これらの一連作品に同じ現象を取り上げても、それぞれに異なる「もの」を用い、登場人物のどのような心理の変化を考えていただろうか。まず、『卯月紅葉』の「水晶」の場面である。

【資料】①「むざんやな、与兵衛は網代の魚のごとくにて・蔵の窓より顔出し、水にても湯にても・せめて煙草飲みたやな。煙管火縄は懐中す・お亀来たらば、火が欲しやと、喉乾かし待ちけるが・ェ、思ひつきたりと、蔵の案内覚えたり・水晶の根付尋ね出し、艾を少し押し当てて・入日の窓に差し向へば、げに炎天の極陽の気・水晶に火移りて艾ふすぼり出でけるを・火縄に移し・やす〳〵と・煙草に気を安めける」

中之巻・蔵の中の与兵衛（傍線は筆者による）

本場面では、与兵衛が蔵の中から探し出した「水晶」で火を起こし、それこそが彼に悲劇をもたらす原因となる。与兵衛が蔵の中に閉じ込められ、さらに外から錠を降ろされて、そこから出ることが出来なくなる。その危機的な状況に落ちた彼は、脱出する方法をあれこれ考える。だが、そこから無事に脱出する具体的な方法を何も考えず、彼はさらに混乱に陥る。そして与兵衛が心を静めるために、煙草を吸うことを思いつく。しかし、火縄がなく、妻のお亀に火を頼めず、蔵の中にあった「水晶」を探し出し、それに窓から漏れ入る日差しを集め、そして起こった火を火縄に移し、煙草を吸う。その後、蔵の裏壁を破って脱出を考え、それを実現する。しかしそこから逃げ出る所に、舅の長兵衛に見つけられ捕まられる。その上、蔵に残された火縄も見つけられ、彼に放火の疑惑が掛けられ、家から追い出される残念な結果をもたらす。与兵衛とお亀が無理やり別れさせられた後仕方なく、お亀も家から逃げ出し、与兵衛と一緒に心中を果たす。この場面は、近松世話物における「生れつきの弱い」人物造形と、筋の悲劇化をする過程として高く評価されてきている。(注38)

そしてこの場面における煙草の趣向は、『曽根崎心中』のお初の喫煙の趣向と同様であり、「煙草をのむ人形のからくり」を見せる趣向であるという指摘がある。(注39) それに対して廣末保は、「与兵衛が最期的な段階に乗り上げてゆく中之巻の結びは、偶然的である」と述べ、近松はこの場面を演劇がクライマックスまでに至る展開における葛藤を緩める効果をもたらす見せ場として設定していたと論じている。(注40) 一方、井口洋は、危機の最中に煙草で気を休める与兵衛の姿に、性格の弱さを読み取っている。さらに、その行動が『卯月紅葉』を通じて一貫し、与兵衛の「気の弱い生まれつき」の発現であると論じる。(注41) このように、先行研究は本場面の与兵衛が煙草を吸う趣向を、人物造形に関わる問題として扱う、その傍ら上演から「場の葛藤を和らげる」効果や、からくりの見せ場を造形する技法として扱うのである。これらは、「水晶」が与兵衛のどのような心理の変化を示しているかという問題を解明していない。

蔵に閉じ込められた与兵衛が「水晶」を取り出し、「日差しを集め」ることに熱中にする。それに成功し、起こった火を「火縄」に移し、「やす〳〵とたばこに気をぞ休めける」。これは、まるで子供が「水晶」に火を集め、火を起こす行動と同様である。近松は、「水晶」の趣向で与兵衛が危機的な状況から自分を無事に救い出せず、物事をさらに悪化させ、状況が修復できない人物であるということを示す。しかし、作者は「水晶」を発火そのものとしての演出に留まらず、与兵衛に子供のように「水晶」に日差しを集める行動をさせる。

それが、観客に彼が成長していないということを伝える技法である。そのことは、彼が煙草に火を移り、それを「やす〳〵と・煙草に気を安めける」という行動からも読み取れる。従って、「水晶」は与兵衛の子供心を象徴しているのである。また、近松はこの「水晶」という「もの」に対して「水晶の根付尋ね出し」、「水晶に火移りて艾ふすぼり」という行動を表す語りの表現力に、からくりの喚起力を従わせて、舞台上の魅力を作り上げていると思われる。これは、近松演劇論における「正根なき木偶にさま〳〵な情を持たせて」との作劇法を示すものに違いない。(注6)

作者は「水晶」という「発火」の現象を連想し、後作の『卯月潤色』で「火打石」の趣向を用いている。そこで、「火打石」は与兵衛のどのような心理を示しているだろうか。次は、『卯月潤色』の場面である。

【資料】②「助給・・中略・・さらば釜を焚き付けて、お茶湯一服供えませうと・火打箱引き寄せて・はた〳〵と打ちければ、お亀すつくと立ち上がり・なう熱や、堪へがたや、愛着恋慕の迷ひの炎・縁にひかれて石の火の身を焦す、あさましや・これまでなりと駆け出づる。我を捨てていづくへぞ・しばし〳〵と縋れども、影も形もなき人の・ありとは見えて園原や伏屋にたてる我が妻の位牌に・隠れ消えにけり」中之巻・幻の語らい

ここでは、「火打石」が火を起こす「もの」である。心中に失敗した与兵衛は、出家の身となっている。群谷庵室でお茶を立てようと考え、釜に火を起こすために、火打ち箱を取り出す。火打石を打つと亡きお亀が現れる。突然現れた彼女は、「なう熱や、堪へがたや、愛着恋慕の迷ひの炎・縁にひかれて石の火の身を焦す」と言い残し消える。「火打石」で起こした火が、生き残った助給に再び心中するきっかけを作る「もの」として取り入れられている。今まで、彼は心中する覚悟ができず、それを先延ばしにしていた。だが、「火打石」の火によって彼がお亀に引かれた結果、後追い心中の覚悟ができ、心中を果たす。ここでは「火打石」が彼の覚悟の変化を示すものなのである。

近松は『卯月紅葉』に「水晶」を『卯月潤色』に「火打石」に変え、与兵衛の心理的な変化を取り入れている。「水晶」は、与平衛が商売を怠り、責任感がなく未熟で子供のような心を持ち、判断力と覚悟を掛けているという人物であることを示す。それに対して「火打石」とは、与平衛の覚悟が弱い状態から、彼がお亀を後追い心中の覚悟ができる状態までの変化を示している。従って、近松は「発火」という現象を効果的に用い、「水晶」と「火打石」のからくり演出技法に、

与兵衛の役柄を子供じみたものから成長する心理状態を象徴させていると言える。

近松は、他の世話浄瑠璃にも火を起こす「趣向」を用いているが、それぞれが瞬間的な人物の心の変化を捉え、性格の変化を示す「もの」は少ないと思われる。また、「水晶」は『卯月紅葉』しか使われていない。そこで、他の作品における「発火」に関する用例を検討し、近松は「発火」という現象に作中人物のどのような心情を託していたかを探ってみる。

【資料】③「下女は眠そに目をすり〳〵・丸裸にて起き出で、火打箱が見えぬ・・中略・・下女は火打をはた〳〵と・・中略・・かち〳〵打てばそろ〳〵開け・・中略・・後に火打ちの石の火の、命の・末こそ短かれ」『曽根崎心中』・元禄十六年・(1703年)

【資料】④「今生の名残、ま一度顔も見たけれど・灯火とてはなつ草に、せめて蛍の影でも欲しい・オ、思ひ当りしと、小石拾うて脇差の・鍔を火打の石の火の光待つ間だの命の楽しみ・下げ緒の房のしげ糸を・火口となして、かち〳〵〳〵・かつしと打つて吹きつくる・日影も息もかすかにて、互ひに見交す顔と顔・長い別れになつたかと、わつとばかりに縋りつき、大声・上げて嘆きしは・理・せめてあはれなり」

『嘉平次・おさが　生玉心中』・正徳五年・1715年

近松は、『曽根崎心中』に「火を起こす」場面を設定している。それは、徳兵衛とお初の脱出する際、下女が「火打ち箱」を取り出し、火打石を「はた〳〵」「かち〳〵」と打ち、火を起こす場面である。この場面が二人の脱出の緊張を表現する傍ら、下女が丸裸で暗闇の中に火を打つ行動には、観客の笑いを取る狙いがあったと論じられている。(注7) さらに、火打の「かち〳〵」という音が、戸を開けることと関連させられ、おはつと徳兵衛の緊張感を表している。当時、この場面がどれほど観客の共感を呼んだか、次作の『心中二枚絵草紙』の火打を怖がる下女が「消えても、こちは火は打たぬ・おれには、火打が禁物ぢや・打つ音聞いてもぞつとする」というセリフが証拠となる。ここは、近松は火打石におはつと徳兵衛の緊張、混乱、心配、恐怖などを託して表現している。そこで、『生玉心中』では、心中の間際で主人公の嘉平衛とおさがの恋人同士が焚き火に火を起こし、相手を最期に見ている。ここも、火打石の「かち〳〵」という音が聴覚的舞台効果をもたらし、その場面その場面の人物の緊張を表現している。

だが、この「かちかち」の音と『卯月潤色』における火打石の「はた〳〵」という音を比べてみれば、二つの場面構造の相違点が見えてくる。『曽根崎心中』、またその十三年忌に

書かれた『生玉心中』では、火打の技法が似ている。近松は、人に見つかってしまうという緊張感あふれる場面では、火打石の軽く音が取り入れている。それに比べて、誰もいない群谷庵室に釜の火を起こす場面では、その火打の音がその自然に響きわたる効果まで考えて取り入れていると言える。さらに、近松はその火打の音を、作中人物の恐怖、不安、悲嘆が響くように示すのである。『曽根崎心中』、『生玉心中』における「発火」は瞬間的変化を描写している。一方、『卯月紅葉』・『卯月潤色』の「発火」の現象が連想され、時間がたつことにつれて起こる変化も示しているのである。

以上に考察した通り、近松は「水晶」と「火打石」で「発火」する趣向を「性根なき木偶にさま〳〵の情をもたせ」る目的で意図的に取り入れ、その詞章の表現力によって登場人物の与兵衛の「弱ゝしい」心理と、その解消する過程の心理的な変化を示す。「水晶」という趣向、それに窓から入る火を集める趣向、それに火を起こす趣向が『卯月紅葉』の個性的な発想であるに違いない。

二　「緋縮緬の帯」の趣向を巡って—

『卯月紅葉』の中之巻においてお亀が盲目の伯母に緋縮緬を渡す、その「緋縮緬」を持ってお亀が、家から脱出する。一方、与兵衛がお亀の喉を刺した後、その傷口を隠すために帯をくるくる巻く。そこで、「緋縮緬」と「帯」が同じ「もの」であるかという疑問が上がる。近松は、その答えを『卯月潤色』に脚色している。生き残った与兵衛自身が「去年の五月に伯母御より。緋縮緬をくだされて御身と我が肌まはり。死骸の恥を隠すしたり」と述懐する。ここから、お亀の喉を巻いた帯は本文には同様なものとして書かれていないが、伯母から貰った緋縮緬であると思われる。

『卯月紅葉』において「緋縮緬」が用いられている。『卯月潤色』に「白縮緬」がある。この「緋」色から「白」色に変化する問題を、時松孝文氏は「当時の舞台の上、赤白の二色は、一心二河白道を連想させるものであった」と説明している。そして、その連想は『卯月紅葉』『卯月潤色』の緋と白の縮緬においても働いている。それは、与兵衛がお亀との心中を失敗し、彼女の後追いという形で心中を果し成仏できたことを示すと述べたことから、「縮緬」は浄瑠璃史の上では、「河（赤＝火（地獄の火の河）、白＝浄土への道）」を表現する「もの」であったと読み取れる。しかし、『卯月紅葉』にお亀に緋縮緬を渡したのは伯母である。また、『卯月潤色』でも伯母が助給に白縮緬を渡した。そこで、伯母がどのような感情を、緋縮緬と白縮緬の「帯」に託して渡したのか。それは、お亀や与平衛にどのような形象を与えたのか、という問題が残っている。そこで、作品における「帯」の役割を検

討してゆく。

『卯月紅葉』・中之巻・「笠屋内の場」では、お亀と与兵衛のことを心配し笠屋に訪れた盲人の伯母が、懐から緋縮緬を取り出して、お亀に与える。その場面は、次の通りである。

【資料】⑤「伯母は涙の隙よりも・懐より縮緬一巻取り出だし、これ・この緋縮緬は、今はこの手は渡らぬとて・この前人に貰ひしが・色変りしか知らぬども、若い者はたしなみぞ・与兵衛とそなたが、肌の物に縫うてしや・男も女子も、旅、他国、どこでどのようなことあつても・肌の物の善し悪しにて・常まで思ひ知らるゝと・渡せば、お亀忝しと・夫もろとも戴きて、あとまで清くあらはせし・心の色の縮緬縮む・命ぞはかなさよ」　中之巻・「伯母と涙と緋縮緬」

右は、伯母がお亀に緋縮緬を渡す場面である。伯母が懐から縮緬を取り出し、「この前人に貰」った「もの」であるが、その「色変り」、緋色が薄くなったという。しかし、それは前人の恩恵、嗜みを包む「もの」である。そのために、お亀がそれをいつも持っていれば、「男も女子も、旅、他国、どこでどのようなことあつても・肌の物の善し悪しにて・常まで思ひ知らるゝ」と、妻として与兵衛を守れると教え、二人の安全を願ってお亀に緋縮緬を渡す。お亀が伯母のその気持ちを「忝しと・夫もろとも戴」く。これは、「緋縮緬」が中心になる場面である。

この場面の背景には、舅の長兵衛と与兵衛の葛藤がある。与兵衛が未熟で商売のお金を使い尽くす性格の人物である。そして、しばしば家出を繰り返し笠屋の商売を怠る。それが舅の長兵衛との不和の原因である。さらに、与兵衛は町所から譲り状を勝手に持ち出し、その問題を深刻化させる。あいにくそれが舅の長兵衛に知られてしまう。そして舅が、神子町で与平衛を見つけ、その事について詮索し、さんざん与兵衛を懲らしめる。そのことを知った伯母が笠屋に駕籠で訪れ、お亀に「皆与兵衛めが悪いぞや・・・中略・・・ぞべ〳〵と着飾つて、謡講の、俳諧の・若いそなたを女房に持つて、内の茶が飲み足らぬか・茶屋へもちよこ〳〵使ふと聞く・意見をすればいぶりを出し、商ひは袖にして・小路隠れの、家出の」と与兵衛の家出を繰り返す性格に心配を表し、親心の不安を打ち明ける。そして、若いお亀に夫の与兵衛を窘めることも大事であると教え、親心の心配、不安を話す。その印に、「懐より縮緬一巻取り出だし」与える。この伯母が緋縮緬を渡す動作が、劇における葛藤から生じる緊張感を和らげる役割を果たす。舅に殴られ懲らしめる与兵衛の場面における二人の葛藤がその状況を悪化させ、悲劇に向かうように展開する。しかし、近松世話物は、悲劇に向かう人物を警戒し、そ

の状態を回復するために、その人物の回りの人間たちが一生懸命に行動するように、脚色されている。その典型的用例は『心中天の網島』の孫右衛門と伯母の役であると言われている。(注9) この場面でも、盲目の伯母は二人の若夫婦を悲劇から守ろうとする。その象徴として緋縮緬を渡す。ここでは、緋縮緬はただの服装の「帯」に限らず、伯母の愛情を込めたものである。これをどこへ行っても肌に離れず持つと「肌の物の善し悪しにて・常まで思ひ知らるゝ」とつね日頃のことまで推し測られ、妻としての義理を果たせるという。緋縮緬には、与兵衛の悪性が夫婦の状況を悪化させず、親子関係や夫婦関係を取り戻すという伯母の願いが込められている。近松は、この場面では「色変り」、「肌の物に縫う」、「肌の物の善し悪しにて・常まで思ひ知らるゝ」という写実的な表現で親の愛情を盛り込んでいる。死ぬ覚悟で白無垢を縫うお亀がその緋縮緬を、与兵衛と一緒に受け取る。本場面に近松は、この緋縮緬を伯母に用いさせ、筋の展開につれて、夫婦が身に離さず持つものとして設定している。近松は「緋縮緬」には伯母の親心を託し、お亀にそれを妻として判断力を与える「もの」として受け継がせている。従って、「緋縮緬」には肉親の愛情、子供に善悪を見分ける判断力が出来るようにとの願いが込められ、同時に受け継いだお亀の伯母への感謝の念と、夫を守る心情が盛り込まれている。

近松は伯母が「緋縮緬」を渡す行動や、お亀がそれを受け取る行動に限らず、さらにお亀がその緋縮緬をどのように扱うかも取り入れている。次は、中之巻の末尾に、お亀は二階から脱出の場面に用いられている。

【資料】⑥「ひそかに人の足音す。そっと二階の障子を明け・覗けば、夫もかきくれて、互ひに声も立てばこそ・うなづき合ひたるばかりにて、泣きくづ・をれしぞ・あはれなる・用意しおきし差替へに・夫の白き帷子、緋縮緬に結び下げ・おろせば下より受け取りて、死ぬる覚悟と心得ける・南無三宝、西町より新町戻りの駕籠に提灯・走って近くくるま長持、蓋を明けてぞ隠れ入る。やゝやり過し。出でければ、いつかは釘を放しけん・虫籠をはづし、帯結びさげ・伝うて下りんその用意。夫は長持引き出だし・心を砕く二階には消ゆるばかりに、蜘蛛の・糸にかゝれる身の命、露の便りの危なさよ・憂きよ、怖さよ。わな〳〵と、震ひ伝ふを、抱きおろし」

中之巻・末尾・二階からお亀の脱出

お亀が伯母から貰った緋縮緬に「夫の白き帷子」を結び下げ、窓の下に待っている夫に渡す。そして「帯」を虫籠に結び下げ、下に降り二人で心中場に向かう。家から追い出された与兵衛とお亀の若い夫婦は、その状況を回復できず二人で心中するしか仕方がなかった。お亀は、伯母に貰った「緋縮

緬」の「帯」を夫婦の守りとして最期まで持って行く。

だが、心中の場面では、近松は「緋縮緬」の代わりに「帯」を使う。与兵衛はそれをお亀の傷口に巻く。作者は、この変化をなぜ用いたのだろうか。そこで、下之巻の「帯」の場面を考察する。

【資料】⑦「憂き目を見せて何事と・夫の手を取り、我が喉に押し当てれば、思ひ切り・南無阿弥陀仏と、笛の鎖・剃刀の刃も折れよと、一刳は刳りしが・若き者の悲しさは、止めの急所を知らずして・まだ息絶えず悶ゆるを・傷の口を隠さんと、抱への帯をくる〳〵と・二、三遍引き回す、憂き目のほどぞ不便なる・我もやがて追つつかんと、喉に当てる剃刀の・刃は鋸と折れ砕け、皮肉ばかり切れけるを・力を入れて突きけれども、通りつべうはなかりけり」

中之巻・梅田堤の場心中・

「帯」は、下之巻・梅田堤の場の心中の場面に用いられる。与兵衛がお亀の喉を剃刀でえぐり切るが、その「傷の口を隠さん」と思い、抱えの「帯」を「くる〳〵」と「二三編」を喉に巻き付ける。だが、与兵衛はお亀ののどを切った後、「まだ息絶えず悶」いても、お亀の死を確かめもせず「傷口を隠さん」と慌てて、「帯」を巻き付ける。彼のこの姿は、彼の覚悟が足りないことを示す。(注18) これは、震えている与兵衛をみたお亀が「夫の手を取り、我が喉に押し当て」ることからも明らかである。そして、自分も死を急ぎ、剃刀を喉に当て、えぐり刺そうとするが、あいにく手が震え、剃刀の歯が折れてしまう。その後、脇差を取って死のうとするが、「手は弱」り、それが跳ね返って、樋之口池に落ち沈む。このような不運を重ね、死にきれず、与兵衛も樋之口池に落ちる。お亀は目がくらみながらも夫を助けようとするが、同じ池に落ち「傷口に水入り」命を果たす。近松は、「帯」の巻き方を、与兵衛を弱い人物として表現する手法として使ったと思われる。

『卯月紅葉』絵入本表紙見返しに載る竹田出雲の口上に「先年曽根崎心中を仕。いづれも様の御意に入りました故此度の心中もその通りに趣向を仕。御覧にかけまする。とかく曽根崎を御見物あそばしますと思召」とある。ここから、『卯月紅葉』の心中場面が、『曽根崎心中』の心中場の趣向取りであったと指摘されている。(注19)『曽根崎心中』で徳兵衛が、お初の体と自分の体を抱え帯で、二本の連理の木に、「二重三重ゆるがやうにしかつと締め」る。その上、お初に「よう締まつたか」と確認に、おはつも「締めました」と答える。比較的に、徳兵衛の行動が、一緒に死ぬという強い覚悟を表現している。しかし、この二つの心中場面に「帯」が体に

「二重三重重ね」や「二三編・・くるくる」巻き付ける表現から、役柄の違いが明確である。『曽根崎心中』に用いる「帯」は、『卯月紅葉』の「帯」と使用方法が異なる。『卯月紅葉』において与兵衛が帯を、お亀の首に「くるくる」「引回」すが、それがしっかりと息を締めなかった。その後、お亀が目をくらませながらも、樋之口池に落ちた与兵衛を助けようとする。「帯」は二人を一緒に結びつかせず、心中は失敗に終わる。だが、『曽根崎心中』では徳兵衛とお初は二人がほどけないように、「帯」を「しかつと」締め、一緒に死ぬ覚悟を示す。ここで「帯」とは、自分の一分を取り戻し、自分が無実であることを証明する覚悟を表現する「もの」である。しかし、「帯」の閉め方が、心中の成功や失敗を示すものとなる。『卯月紅葉』の緩い締め方は、心中の失敗を示す。従って、近松は「帯」そのもの、その使用方法の変化を取り入れ、人物造形の技法として用いている。そして「くるくる」と「しかつと」という動的な表現を使い、場面に動きを求めているとも言える。当時代でも、観客にそれが気づかれただろう。以上の検討から、『卯月紅葉』の心中場における「帯」が『曽根崎心中』の「帯」の趣向取りであり、そのために、作者は詞章的に「緋縮緬」の代わりに「帯」という言葉を使ったかも知りません。

だが、前述した通り、心中場では与兵衛がお亀の喉傷に巻いた「帯」は「緋縮緬」である。近松は、それを『卯月潤色』の「白縮緬」に変えた。その意図を検討する。次は、『卯月潤色』中之巻の伯母から届いた縮緬の帯を、お亀の位牌に備え、その後心中を果たす場面である。

【資料】⑧「位牌に向ひ・これお亀、去年の五月に伯母御より。緋縮緬をくだされて御身と我が肌まはり・死骸の恥を隠したり・時しもあれ、今宵また白縮緬のくけ帯・これも二人が申し受け、長き形見と身に付けん・我も受け取る、受け取れと、位牌の領巾に結び付け・端を左手にしかつと絡み、かう持つたる心こそ・最期は後れ、先立つとも、手に手をとつて行く道は・たゞ一筋の白縮緬の延ばさぬ時刻只今と・・・中略・・・我らを地獄に沈めても、伯母御の二世を助けてたべ・南無阿弥陀仏と、剃刀を喉にかばと突き立てて・笛の鎖をはね切つたり。」　中之巻・「助給跡追いの心中」

群谷庵室に修業中の助給と名前を改めた与兵衛の所に、伯母からの白縮緬が届く。さらに、伯母は、お亀の命日が近づき、与兵衛が追いかける心中を起こすということを恐れ、「かならず疎かになさるゝな」と忠告し伝言を贈る。与兵衛は、伯母に感謝を表し、白縮緬をお亀の位牌の前に置く。そして二人で伯母からの縮緬を「我も受け取る、受け取れと」いって受け取る。近松は、『卯月紅葉』と『卯月潤色』にお

ける伯母からの縮緬に対する与兵衛の態度が変わっているように描写している。『卯月紅葉』では「夫婦のたしなみ」として縮緬をお亀が受け取る。与兵衛もその場にいたが、それに対する感情、責任が表れていない。一方、『卯月潤色』において与兵衛の「我も受け取る」というセリフには、伯母から縮緬を受け取る責任感が表現されている。つまり、作者が『卯月紅葉』にはお亀の役を夫の与兵衛の役より、責任感、判断力、善悪を極める力がある人物として作り上げるために、伯母から「緋縮緬」をお亀に受け取らせる。また、お亀がそれに夫の白無垢を結び心中の場面まで持って行く。一方、与兵衛は「生まれつきの弱い」役柄であり、伯母から貰った緋縮緬の重み、価値観を担う力が欠けていた。それは、彼の心中する覚悟にも現れる。手が震え、お亀の喉を抉るが、彼女の死を確かめる前に、死骸の恥が心配になり、「帯」で「二重三重くる〳〵」まく。「帯」の「くる〳〵」巻くことにも、彼の弱い性格が現れる。その彼には、伯母が渡した代々受け継いだ緋縮緬を使わせるわけにはいかなかった。従って、近松は『卯月紅葉』の心中の場面では「緋縮緬」の代わりに、「帯」という言葉を使った。それに対して、助給が心中する際、伯母から自分で受け取った「白縮緬の帯」の一筋をお亀の位牌に結び付け、もう一「端を左手にしかつと絡み」、伯母に「我らは地獄に沈めても、伯母御の二世を助けて」と述懐して心中を果たす。この場面における「帯」に対して「しかつと」という言葉が、『曽根崎心中』と同様である。つまり、『卯月紅葉』とその続編『卯月潤色』は、与兵衛の「生まれつき弱い」性格から強い覚悟が出来る一人前になるという世話物である。作者は、与兵衛のその心理的な変化の過程を「帯」に託して表現している。

このように、近松は『卯月紅葉』に「緋縮緬」の「帯」と、『卯月潤色』の「白縮緬」を伯母、お亀、与兵衛の三人の心理変化を示すものとしてを取り上げている。『卯月紅葉』に「緋縮緬」の「帯」は、伯母がお亀に「夫婦の嗜み」として抱く。お亀も伯母のその感情を応えるために、それを肌に離さず使う。そして与兵衛が無意識的に、その緋縮緬をお亀の傷口に巻き、彼女が伯母の気持ちに最期まで応えることを示す。だが、『卯月紅葉』には与兵衛は伯母から貰った緋縮緬の重みを自覚する状態ではなかった。従って、作者は意図的に「緋縮緬」という表現せず、「帯」という表現を使った。一方、『卯月潤色』に与兵衛は、伯母が送った「白縮緬」に託した思いを理解するまで成長していた。そしてその「縮緬」を手に緩めないように持ち、その思いに応える。

三　まとめ

以上の検討から、作者は『卯月紅葉』に「水晶」を与兵衛に持たせ、「縮緬の帯」を伯母、お亀、与兵衛に使用させて

いると言えるのである。それに対して『卯月潤色』においては「火打石」を与兵衛、「白縮緬の帯」を伯母と与兵衛が用いるものである。それぞれの役柄がそのものをどのように用いるか、その「もの」に託している思いを表現しているのである。

以下は、人物に対して「もの」に託した感情的な変化をまとめる。作品別に人物、表現、感情に分ける。さらに、場面・小道具に託した作者の意図も示す。

○『卯月紅葉』

「水晶」

与兵衛「水晶に火移りて」＝煙草の火を起こす行動、瞬間的、感情的な混乱を鎮め、落ち着く

作者の意図　人物造形＝与兵衛＝弱い生まれつき

人形浄瑠璃の「火」のからくり

演劇がクライマックスまでに至る展開における葛藤を緩める効果をもたらす見せ場

「緋縮緬」

伯母　「前の人から貰った」＝前人の恩恵、一家への責任感、義理、

お亀への期待、与兵衛の性根の改善、夫婦の幸せ、親の願い

お亀　「お亀忝しと・夫もろとも戴きて」＝　伯母への感謝、夫婦の嗜み

「夫の白き帷子、緋縮緬に結び」＝与兵衛と別れず、最期まで、夫を守る

与兵衛　緋縮緬への感情が表現されず、

伯母から頂いた「もの」の自覚がない

「帯」　＝　お亀の死骸の恥を隠す

作者の近松

「緋縮緬」

「緋縮緬・・・渡せば」＝　場面の葛藤を和らげる

「心の色の縮緬縮む」「命ぞはかなさよ」

心中の暗示

「帯」　「帯・・・くる〳〵巻く」

「曽根崎心中」の心中場・帯の趣向取

与兵衛の人物造形（弱い性格）

「一心二河白道」の火の河を演出的に表現する縮緬（赤）

○『卯月潤色』

「火打石」

与兵衛「はた〳〵と打ちければ」　覚悟の変化、

「お亀すつくと立ち上がり」

お亀の亡霊が現れる　悲嘆、驚き、恐怖

作者の意図　人物造形＝与兵衛＝弱い生まれつき

人形浄瑠璃の「火」のからくり

演劇的に亡霊の登場の仕掛け

「白縮緬」

伯母「かならず疎かになさるゝな」＝与兵衛の死、災難を防ぐ

与兵衛「我も受け取る」

「我らは地獄に沈めても、伯母御の二世を助けて」

＝　伯母への感謝、尊敬

「端を左手にしかつと絡み」＝強い覚悟、お亀と一緒になる心、

作者の近松　人物の改善

心中物の達成

「一心二河白道」の「白道」を演出的に表現する縮緬

『卯月紅葉』における「水晶」・「帯」の趣向の役割について論じてきた。浄瑠璃・歌舞伎では、一般的に服装が人物の身分・状態を知らせる道具である。そこで、浄瑠璃作者には観客がなじみ深い「もの」を取り上げ、それに演出的な動機を求め、それによって舞台に役を表現することが重要になってくる。本作品にも、作者近松は子供だましとしか思われない「水晶に集めた日差しで火を起こす」という趣向を取り入れ、与平衛の「弱弱しい」心を表現している。一方、代々受け継がれた緋縮緬がお亀に伯母から守りとして渡される「もの」の象徴である。

終わり

本稿をまとめれば、以下のことがいえよう。

○本作は、当時の観客に、日常生活品として慣れ親しまれた「もの」を効果的に用いている。

○また本作は、舞台上の演劇として「動的」な表現を、詞章の上で効果的に用いている。これは、「正根なき木偶にさま〳〵な情を持たせて」との作劇法である。

近松の他の世話物においても、例えば『曾根崎心中』の「編笠」など検証すべき例は多いが、近松門左衛門は「もの」使いの上手い作者として改めて捉え直さなければならないだろう。

【注】

【注①】時松孝文「『ひぢりめん卯月紅葉』試論、近松世話浄瑠璃の言葉と物」（「芸能史研究」一〇六号、一九八九年）による。

【注②】廣末保著、『近松序説』、未來社、東京、一九六三年による。

【注③】【注②】と同じ。

【注④】『曽根崎心中』のお初の煙草の喫煙の趣向に関する所は、祐田善雄氏校註、『曽根崎心中・冥土飛脚他後篇』、岩波文庫、一九七七年による。

【注⑤】井口洋の説は、井口洋著『近松世話浄瑠璃論』、和泉書院、大阪、昭和六一年による。

【注⑥】『難波土産』に納めた近松演劇論に関する引用は、『江戸人物読本　近松門左衛門』（武井協三編、一九九一年ぺりかん社）と、原道生著、「虚実皮膜論」『鑑賞日本古典16　近松集』、尚学図書一九八二年による。

【注⑦】下女の火打石に関する説は、原道生著、「通れぬ戸口―近世世話物の場合―」「近世文学論叢」、一九九二年による。

【注⑧】【注①】と同じ。

【注⑨】【注②】と同じ。

【注⑩】【注①】と同じ。

【注⑪】【注①】と同じ。

・近松作品の引用は、『近松門左衛門集②』（新編日本古典文学全集75、小学館、一九九七年）による。